

# 「兼常と号する者 最も嘉なり」の真意

伊藤三平(刀剣史研究家)

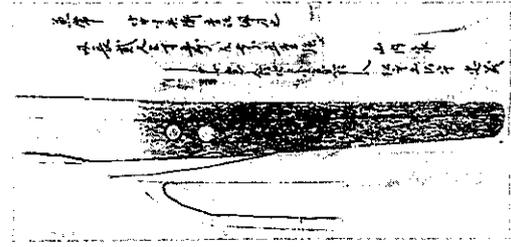
美濃鍛冶「兼常」の評価を裏付ける逸話として、中国の明時代の書物『武備志』(茅元凱著、一六二二年刊)に「兼常と号する者最も嘉なり」と記されていることは『日本刀工辞典 古刀篇』(藤代義雄著)、『日本刀大百科事典』(福永純剣著)の「兼常」の項で紹介されている。

今回、この言葉の真意が刀剣界で認識されている意味とは違っているところにあるの解釈を聞き、刀剣商など斯界のプロの方が購読されている『刀剣界』で発表してお知恵を拝借したい。

経緯を簡単に述べると、昨年の十月に発刊された『週刊日本刀』72号に「中国大陸と日本刀輸出―工業立国・日本の礎となった業と技術―」の小論を発表したが、その調査過程のこぼれである。

小論では、輸出刀剣を製造した鍛冶集団にも言及し、その中で前記の『武備志』の記述を紹介した。美濃鍛冶の作りも美濃から近江に運ばれ、水運は琵琶湖→瀬田川・宇治川→伏見の巨椋池→淀川・堺のルートで輸出されたと考えるのは無理がない。

『週刊日本刀』の編集部から『武備志』のどこに出ているのかと問い合わせてある。小論に挿入する図版に『武備志』の該当ページを入れているを模範されたのだろうと推測される。



竹中半兵衛所持とされる兼常(山田英『日本刀関七流』所載)

『武備志』は全二百四十巻もあり、いろいろかき回したが、グーグルの検索を探すと中国語の「中国哲学書電子化計画」というサイトの「一節に『武備志』の全文が掲載されていて、その「武備志 一百一十九」と「同 20」に兼常に言及した箇所と思われるものを見つけた。ネット社会のおかげである。(当該サイト) <https://ctext.org/wiki.pl?if=gb&chapter=537022&searchu=%E5%85%B6%E5%B8%B8>

▶ 一百一十九 (兼常の当該箇所傍線は筆者)

刀大小長短不同立名亦異每人有一長刀詳之 佩刀其刀七又揮一小刀以便應用又一則刀長 以尺者謂之解手刀長尺餘者謂之懸抄亦刺刀之圍此一書乃圍身必用者也其六而長柄者乃標槍近用可以殺人圍之先導其以皮條纏刀輔佩之於肩載設之於手乃圍後所圍謂之大制 又有小裁紙設接刀出長而號兼常者蓋屬又有作差圍買遺不却大小名雖為刀其實無用、上等曰上軍刀山城君殿時鑿取日本名器名產封鎖庫中不限歲月竭其工巧謂之上軍刀其間號號久者蓋屬世代相傳以此川上 灰等曰備前刀以有血酒為巧刀上或鑿龍或鑿劍或鑿八幡大薩春日大明神天照皇大神宮皆其形蓋在外為美觀者

▶ 一百二十  
如匠人製造之精不謂刀大小必於柄上一面鐫名面刻記字號以為古今賞否之辨鈎劍亦然

見ていただいてわかるように、高校で習った程度の漢文知識では歯が立たない内容で、難しく解説できない。小論執筆時では原稿の締め切りもあり、こ

まどとして「今回、『武備志』の原文に当たると巻一百二に「號兼常者蓋嘉」の一節があることを突き止めた。この辺りの文意は難読の漢文で私には解説できないが、文中には長門、山城、備前などの国らしい単語が見えるから、これらの国の鍛冶の作品もあったのであるかと取りまどめを発表した。

その後、中国人に人脉のある夫妻を思い出し、奥さまを通じて何人かの学識のある中国人に確認していただいたが、中国人でもお手上げの古文を難航した。しばらくしてから夫妻を通じて、本言に正確な訳になっているのは自信がないが、次のように解説できると言う方からの連絡を受けた。

「日本刀には大小長短色々あり、長い刀は佩刀するのど腰刀があり、腰刀は雑用に使われる。長い柄の刀は武將が先頭に立って戦い、太刀の草ひもを手に着いたり、肩にかけるようにしている。また、紙を切るための小刀は兼常がお祝い用やお礼品としてよく使われているが、美用にはならない。上等刀は日本國業米の時には山城國に有名刀工を求め、期間の制限なく、また生涯をかけて名刀を作製させた。代々大事に伝わっている。備前刀は刀種があり、八幡大菩薩、春日大明神、天照大神宮等の彫り物があり、美観を見ている。刀鍛冶は区別するために作者名と年号を入れている。火繩銃と剣も同様である。」

これによると、兼常は紙を切るための小刀としてお祝い用やお礼品によく使われるが、美用にならないという意味のことである。

「号兼常」の前にある「出雲国」は訳されはならず、国号の長門(山口県)のことかとも思うが、わからない。美濃の兼常は利刀であり、こんな評は当てはまらないので、『日本刀鑑鑑』(石井昌国編著)を調みると、永祿頃の出雲に

兼常がいることは記されているが、長門の兼常はない。

刀剣界のために『武備志』の該当箇所の正確な翻訳があらためて必要と考えます。刀剣店のお客さまにも中国の方が多くなっているとも聞いております。お客さまの中国人や、お知り合いの日本の學者にも確認していただければ幸いです。

なお、兼常については、隣國の評価を待つまでもなく、日本の武人や鑑定家も高く評価している。『日本刀工辞典 古刀篇』『日本刀の掟と特徴』(本阿弥光透著)でも高評価が記されているが、ここでは戦前の中央刀剣鑑査員山岡重厚氏の『日本刀伝説録』(氏の

評価は備前・美濃伝重視に偏っているか)で見つけた名刀の二振として兼常にあえて一章を割いている内容を紹介したい。

その兼常とは、豊臣秀吉の知恵袋として名高い竹中半兵衛重治が所持し、毛利徳政守勝信(秀吉家臣で森吉成とも名乗る)に贈られ、後に山内忠義(土佐藩二代藩主)に渡り山内家重宝として伝わったものである。同書では「美濃の両兼と称せられ天下を風靡したる國の兼定、兼正にも此竹中半兵衛の兼常の墨を摩する(技量ほぼ同じ)刀は未だ見たることなく今日迄秘蔵せる美濃刀中の第一位の刀と信じる感のするものである」と感賞している。

第57号  
**刀 劍 界**  
令和3年1月15日発行(隔月刊)